

公教育の原理的課題と身体探究

深澤浩洋 (筑波大学)

キーワード：自由民主主義、闘技的民主主義、共同性、主体性、他性

1. 公教育の課題から身体を探究する意味

- ・日本における「教育改革」と体育：知的教育とは異なる立場からの主張の可能性
- ・本報告のねらい：公教育の課題を整理、体育が果たしうる役割、身体が体育に対して有する可能性、身体の様相を検討

2. 教育改革の問題と方向性

- 学校選択制や習熟度別学習に含まれる問題点：分断・格差の招来
 - ・政治体制の変遷（寡頭制→民主制→独裁制）に表れる衆愚政治に陥る危惧
 - ・民主制「この国家には自由が支配していて、何でも話せる言論の自由が行きわたっていると同時に、そこではなんでも思いどおりのことを行なうことが放任されている」¹（プラトン）
- 育成されるべき市民像とその資質・能力
 - 1) 民主主義（ローカル）：国家や地方自治体の維持に必要な身体的能力・資質；多様性
 - 2) 自由主義（グローバル）：地球市民として必要な身体能力・資質、コスモポリタン；普遍性
 グローバル化時代において、これらの両立をどう考えるか。多文化的な国家では、
 - ①「多様性」なき「統一」はマジョリティによる「覇権と抑圧」を生み、
 - ②「統一」なき「多様性」からは、「分裂」を生む、といった難しさがある²。
 cf. 1985年（英）：通称スワン・レポート：「統一の中の多様性」（Diversity within Unity）³
 ナショナル・カリキュラムやナショナル・テストの導入の背景、学校選択制や自律的学校運営の導入の背景
 日本：学力・能力に応じて学習集団を分ける方向（習熟度別クラス、偏差値に基づく進学先）
- ・教育の自由化・（個性を反映した）市場化
- ・民主主義の誤用に陥る危険性：「合意主義」「もっとも対立的な争点を政策課題の中から外す」「暫定協定」「政治的なものなかに存する闘争と敵対の次元を承認しなければならない」⁴
 「普遍主義的な自由主義の論理が、平等を中心とする民主主義概念と対立する」⁵：自由民主主義（ムフ,S.）
- ・自由主義と民主主義：République と Democrate との対立、公権力（国家）と私的権力（宗教や民族）
 ex. フランス：République の理念の下、私的権力からの自由を公権力が確保しようとした歴史⁶
 現在、政治的左派の側にはシティズンシップの理念を復権させようとする数多くの試みがなされている。しかし、（中略）重要なのは、政治共同体のすべての成員に適用できる包括的かつ中立的なシティズンシップの概念を目指すことではない。（中略）
 シティズンシップは、民主政治にとって重要である。だが現代民主主義理論は、われわれの市民としてのアイデンティティについて、複数の競合する概念を許容する十分な余地をつくっておく必要がある⁷。
- 闘技的民主主義 antagonistic democracy
 自由主義と民主主義の両者が相容れないことを指摘、「複数主義的民主主義にも一定の合意が必要であり、（中略）その合意は『対立含みの合意』であらざるを得ない」⁸。自由主義的保守主義、社会民主主義、新自由主義、ラディカル・デモクラシーといった多様なシティズンシップ概念をめぐる対立的な「抗争」というより「闘技」。
 「闘技的複数主義」の視座は、（中略）十全に達成された民主主義が実現可能だという幻想に反して、民主主義的な異議申し立てをたえず開かれたものにしていくよう、私たちに強いるのである⁹。
- ・レス・プブリカ（res publica：公的ことがら・関心）：シティズンシップの人倫的性格や政治的性格¹⁰
 政治：「多様性と闘争という文脈のなかで、『われわれ』というものを構成する」¹¹と同時に、「彼ら」から区別する境界を定める（「敵」を定義） cf. 政治の本質：「友-敵」関係（シュミット,K.）¹²

3. 市民にとっての他性と共同性

○闘技的民主主義からの示唆

- ・レス・プブリカは暫定的、異議申し立ての可能性に開かれている
- ・情勢の相対化・恒常性の否定から生まれる批判的態度・緊張感の確保、他性の受容
- ・市民の主体性と共同性の担保：市民が孤立した状態では政治的な力を持つことはできず、市民が個別に自由な活動を求めるだけでは、お互いの自由が干渉を受ける。

○自らが自由に生きるために、他者の自由を認める。苫野：〈自由の相互承認〉に自由の本質¹³。

公教育は、すべての子ども（人）が〈自由〉な存在たりうるよう、そのために必要な“力”－わたしはこれを〈教養＝力能〉と呼んでいます－を育むことで、各人の〈自由〉を実質的に保証¹⁴（苫野）

- ・〈自由の相互承認〉の“感度”を育むことが公教育には必要¹⁵

「他者の存在をまずは認める感性・態度」¹⁶：他者の価値観や感受性が異なっていたり共感することができなかつたりしても、自由を著しく損なわない限りにおいて、その存在をひとまず承認する感度¹⁷

- ・〈自由の相互承認〉を原理とする社会の構築に向けた公教育の方向：学びの「個別化」と「協同化」
個別化だけでは、他者とのつながりが希薄、人々の不安やむなしさを招来する可能性、「個の自立や確立」が優先課題、次に協同を生み出す方向

○トランスパーソナル心理学にみる共同性

乳幼児のような自他未分化な状態のプレパーソナル（前個）→自我を確立し自己実現した状態のパースナル→理性的自我を包み超えたトランスパーソナル（超個）¹⁸

- ・トランスパーソナルな状態：人間が宇宙の一部、自らの内なる〈いのちの働き〉、真なる主体¹⁹
- ・現代人が抱えるむなしさ：様々な物事の意味の喪失感やそれらとのつながりの喪失²⁰（諸富）
cf. 溶解体験²¹（作田・矢野・久保）
- ・トランスパーソナルな状態から見出される自立した個人：他者の存在を認め、共感を覚える→共同性
他者も自身と同じように振る舞うとは限らないという他性、緊張や軋轢を生む可能性

4. 身体教育の貢献と探究すべき身体の様相

○闘技的民主主義を担い他者の存在を相互に認めあう態度の育成に向けた公教育に対し、身体教育にできること、あるべき身体とは何か

- ・身体：異議申し立てや競争が起こる場の共有を可能とするもの

○身体教育：他者の存在を認めうる身体への育成

- ・他者を身体レベルで感じ取ること、その前段階として、例えば、さまざまな身体運動を通して「できる・できない、わかる・わからない、感じる・感じない、楽しい・楽しくない、面白い・面白くない」を弁別する感性
- ・身体以外にも道具や物体から受ける抵抗や圧力、重量感、自身の身体に感ずる疲労感や痛み、爽快感など

cf. 「溶解体験」²²によって、自身の身の回りの自然とのつながりや自然に支えられていることを看取

- ・スポーツ運動：自身の思い通りにはならない他者の身体運動 ex. フェイント

自身には如何ともしがたい他者という存在の認識、自身にとっての不自由や自由が他者にとっての自由や不自由となることの認識

○自身の身体に対しても他性の認識：身体の主体性；例えば相手のフェイントに咄嗟に反応したり、仲間と協調的な運動を遂行できたりすることは、意識しすぎるとうまくいかない場合がある。

- ・相手に対する共感が生まれる可能性 cf. ミラーニューロン、同調反応、姿勢反響
- ・共同性や党派の形成

5. おわりに

○身体運動やスポーツの重要性

- ・健康や豊かな人生・生活を人々と共に送る
- ・統一的な共通善を見いだせなくなってしまった現代社会においては、普遍的な市民像も見出し難い

闘技的民主主義、正統性をもった「対抗者」、自由民主主義への倫理—政治的な志向の共有²³、相互に異議申し立てに開かれているところに両者の緊張関係、反省的契機（ムフ、S.）

○他者の他性を感知するとともに他者と身体のレベルで通じ合うことのできる身体

・共感能力の育成

・スポーツやダンス、体操や体づくり運動

・インクルーシブ体育や障害者と健常者が共に参加するスポーツ

さまざまな立場、バックグラウンド、能力を持つ人々の存在を認識し、認め、交流する機会

ex. 障害者と健常者とがともに競い合うことのできるスポーツの考案：お互いの身体（能力）を認識し、適度な緊張や面白さを生み出すルール設定を考える機会

○運動部活動：比較的類似した興味や嗜好、運動レベルの生徒らが集まって行う活動、生涯スポーツの入口

・私的な幸福の追求のあり方の一つを提供することに加え、他者との社会関係形成の基礎

○身体教育は、知育・徳育・体育という並列的な関係ではなく、これらの教育の基盤としての位置づけ

ex. 徳育への可能性：身体的共感の研究

知育への可能性：身体知や生物としての弁別能力；知への萌芽

・総合学習や合科への可能性

・身体教育は、様々な教育の基盤として潜在的な位置づけ

<注>

1 プラトン（藤沢令夫訳）（1979）国家（下）．岩波文庫：東京， p.204[557B]

2 中島久朱（2008）グローバル化と公教育—教育基本法「改正」論議と日本における多文化教育の可能性—．多言語多文化—実践と研究， 1， p.108

3 前掲 中島久朱（2008） p.105

4 シャンタル・ムフ（千葉眞・土井美徳・田中智彦・山田竜作訳）（1998）政治的なるものの再興．日本経済評論社：東京， pp.308-309

5 シャンタル・ムフ（葛西弘隆訳）（2006）民主主義の逆説．以文社：東京， p.16

6 樋口陽一（2006）教育をめぐる「公」と「私」．日本教育法学会年報， 第 35 号， pp.10-11

7 前掲 シャンタル・ムフ（1998） pp.13-14

8 前掲 シャンタル・ムフ（2006） p.160

9 前掲 シャンタル・ムフ（2006） p.162

10 前掲 シャンタル・ムフ（2006） p.134

11 前掲 シャンタル・ムフ（2006） p.139

12 例えば、前掲 シャンタル・ムフ（2006） p.79

13 苦野一徳（2014）教育の力．講談社：東京， p.22

14 前掲 苦野一徳（2014） p.23

15 前掲 苦野一徳（2014） p.25

16 前掲 苦野一徳（2014） p.26

17 同上

18 諸富祥彦（1997）〈むなしさ〉の心理学—なぜ満たされないのか．講談社：東京， p.161

19 前掲 諸富祥彦（1997） p.165, p.187

20 前掲 諸富祥彦（1997） p.200

21 作田啓一（1993）生成の社会学をめざして—価値観と性格．有斐閣：東京．、矢野智司（1995）子どもという思想．玉川大学出版局：東京．、久保正秋（2015）意味生成としての「スポーツ運動」体験の構造．体育学研究， 60， pp.617-633

22 前掲 久保正秋（2015）

23 前掲 シャンタル・ムフ（2006） p.158